

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸  
席員  
研究員17 都市の景観を  
考える

そもそも、現代のような近代的な街路樹の整備が始まったのは、明治時代に入ってからで、とりわけ高度成長期以降しばらくの間は、景観構成上のアイテムというよりも、大気汚染・騒音対策、また乱開発により緑の減少を補充するためといった目的による植樹が大きかった。

そのため比較的高木を基本に葉ぶり、枝ぶりの良いアオギリ等が好まれたのである。

しかしながら、現代においては、それら高木が老ガイ化したことによる、倒木の恐れや信号機を隠してしまうといった交通障害、そ

して定期的な維持管理費用等の増大により、昨今は敬遠されるようになったのが実情だ。

しかしながら、都市であれまちであれ、一つのブランディングの構成要素として「緑」の存在価値は極めて重要であることに変わりはないようである。

つまり修景の中に、いかに緑が配置され、周辺とどう調和し、心地よい空間造形をしているかが、そのまちの付加価値を高めている点である。

長野市においても、その実例となるのが、新田町以北の善光寺表参道であろう。

末広町から新田町交差点に至る鬱蒼(うつそう)と続く街路樹街を抜け、その交差点に立つと一気に解放感に満ちた空間が広がる。それを目の当たりにしているのは筆者だけではないはずである。

車道部の色彩を明度の高い色を基本に、その舗装に桜色の御影石を取り込み、また両側の歩道部については、一定距離を保ちながら休憩スペースを配し、そこには集中的にベンチ、そして緑陰を確保しながら、さらに高木を撤去し草花植栽を設ける、といった外来者

にとつては、極めて心地良い空間を演出している。

この試みは、全国的にも極めて注目度も高く、とりわけ景観再生事業に積極的に取り組む全国各地の温泉郷からの視察も多いのだ。

そして、強いて一つ残念であり望むべくは、長野市にあつて「水」のある修景がまだまだ取り込めていないことである。

同市には、今もかつての生活用水や重要な役割を果たす農業用水が数多く存在し、市街地においてもその縁辺部においても、その存在が長きにわたりまちの風景を造り出してきた。

この用水を小路も含めた修景という形にできないものか、と筆者は考えるのである。

(続く)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長